

昔から、野鳥の鳴き声やさえずりはさまざまな言葉、文章、カタカナ言葉で表現され、人々に伝えられてきました。これを「聞きなし」といいます。有名なものでは、ウグイスの「ホー、法華経」、カッコウの「郭公、郭公」、ホトトギスの「特許許可局」（実在の官庁は「特許庁）」などが知られています。どれもその野鳥の鳴き声をうまく表現していると思います。「勝手に聞きなし」というものもあります。たとえば、私にはイカル（森の野鳥）の声が「書記長、いる？」と聞こえます。

昆虫にも鳴く虫は多いです。野鳥ほど多くはありませんが、昆虫の声にも「聞きなし」は存在します。特にバッタ類やセミ類に多いと思います。その中でも、最も正確に虫の声を表現したのが「ミンミンゼミ」でしょう。鳴き声そのまま和名になっているのも面白いです。子どもの頃、自分の鼻をつまんで「ミーンミンミンミン・・・」と言って真似したものです。

先日も、私の研究室の外で、アブラゼミとミンミンゼミが大合唱をしていました。私は「ミンミンゼミがミンミン鳴くのか」再確認しようと、音入りで録画してみました。やはり「ミーンミンミンミン・・・」以外の声には聞こえません。それにしてもあの小さな体で、どうやってこんな大音量の声をさせるのか、全く不思議です。

(2023年8月上旬／お茶の水女子大学構内)

